

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究 C
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18520188
 研究課題名（和文）フランスにおけるラスキン受容-美術教育と文学
 研究課題名（英文） The influence of Ruskin in France - art education and literature
 研究代表者
 加藤 靖恵 (KATO YASUE)
 名古屋大学・大学院文学研究科・准教授
 研究者番号：90313725

研究成果の概要（和文）：ラスキンがフランスの文学と美術批評に与えた影響について、プルーストとその周辺の文学作品や評論、及びそれらの草稿をもとりあげて、以下の4点に重点を置いて調査をした。1) フランス 19 世紀の美術哲学の流れにおける位置づけ、2) 高踏派から象徴主義に至る文学・美学的変遷との関連、3) 英仏のイタリア中世絵画の再評価の動きにおける役割、4) 美術館論の発展における役割。

研究成果の概要（英文）：We have studied the influence of Ruskin on literature and art criticism of French nineteenth-twentieth centuries, analyzing the works (including manuscripts) of Marcel Proust and of his contemporaries: a) theories of Ruskin and the development of aesthetic philosophy in France, 2) Ruskin and literary and artistic developments in France, particularly its impact on the Parnassian and symbolic writers, 3) Ruskin and the appreciation of Italian painting of the Middle Ages in France and England, 4) Ruskin's concept of museum and development of museums in Europe.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,100,000		1,100,000
2007 年度	700,000	210,000	910000
2008 年度	700,000	210,000	910000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,400,000	690,000	4,090,000

研究分野：フランス文学、比較文学

科研費の分科・細目：

キーワード：ラスキン、プルースト

1. 研究開始当初の背景

ラスキンのフランス受容は、ラスキン研究者、またプルーストを中心とするフランス文学・美学研究者により、いくつかの重要な論文が存在し、注目されているテーマだが、両者の間の解釈の微妙な隔たりの解消が課題

として残されている。また文学テキストを材料に、当時の社会的または文化的状況を探究するという方法も今日最も重視されるようになっており、その成果をさらに取り入れて、ラスキンに関する総合的な研究をすることが有効と思われる。

申請者は、ブルーストのラスキンの翻訳、註、序文の草稿を研究の中心に据え、成果を発表していた。ブルースト研究の枠を超えて、ラスキンの専門研究の成果を積極的に活用しつつ、美学・美術史、文化史的な展望をもったヨーロッパ文化研究の構築のための準備ができていると判断した。

2. 研究の目的

従来イギリス文学、フランス文学、美学・美術史学、社会学といった個々の専門家が進めてきた研究の成果を、統合的視点から再構築し、また一方で個別の専門研究をさらに推進することに貢献する礎を形成することを目的とする。

3. 研究の方法

1) 研究課題に「美術教育」とあるが、ラスキンの場合は広範囲に渡る。研究開始時点で代表者の研究が最終段階に至っていた美学哲学の問題、同様に調査を進めている美術館を巡る行政のあり方の問題、作品の複製の出版の問題、学校教育、さらには都市景観の問題がある。ラスキンは特に労働者の芸術教育についても関心をもち、産業革命後の階級をめぐる社会思想へと広がりを見せている。19-20世紀の英仏両国の文化的状況、そしてフランスにおけるラスキン受容の状況の綿密な資料調査をして、最も特徴的な点をピックアップする。

2) ラスキンに関する専門研究については、19世紀後半から20世紀初頭のものにはほぼ把握しているが、今日の研究動向もさらに密にたどる必要がある。図書、資料を集めるとともに、日本、イギリス、フランスの研究グループと積極的にコンタクトをとる。

3) ラスキンに言及する文献としては、ブルーストやその周辺の主だった批評家のものは研究を進めているが、さらに新聞や文芸雑誌の論文、文学作品等の発掘をする。その際、当時の様々な作家の日記、メモノート、草稿も可能な限り調査の対象とする。

以上の研究は、日本国内の図書館やフランス国立図書館の資料を活用しつつ、フランス国立近代草稿研究所のブルート班の協力を仰ぎながら行う。また所属している日本ラスキン協会、さらに今後はランカスター大学のラスキンセンターとのコンタクトも密にし、ラスキン専門研究の最先端の成果を取り入れる。

4. 研究成果

ブルースト研究を中心にしつつ、ラスキンがフランスの文学と美術批評に与えた影響

について研究をした。主な成果は以下の通りである。

1) フランス19世紀の美術哲学の流れにおけるラスキンとブルーストの言説の位置づけ。ラスキンが美術作品の評価をする上で、作品固有の美ではなく、付随的な価値、特に神の非創造物としての自然に対する敬愛の念の発露の有無、道徳観念の現れ等に大きな判断基準をおいたことを、「偶像崇拜」と呼んで批判した。この点について『アミアンの聖書』序文で展開されるブルーストの論と、美の判断基準をめぐる19世紀の美術哲学の流れとを克明にたどり、ラスキンの美学がフランスで受容された背景を明らかにした。

2) ルコント・ド・リールを中心とする高踏派から象徴主義に至る文学・美学的変遷におけるラスキン受容の役割とブルーストの見地の変化。ボードレール論中でルコント・ド・リールを論じた箇所は、1909年にすでに草稿ノートに素描されたものである。ここでブルーストはラスキンが体现する知性主義の反例として、詩人の感覚に訴えるイメージの豊かな作品を分析している。この草稿と、最終的に世に出たテクストの比較、『ジャン・サントイユ』草稿、『失われた時を求めて』の草稿、タイプ原稿、最終稿と順にたどることにより、詩人を巡るブルーストの観点の変化を明らかにし、その分析をした。また最初の詩集の出版から死後に至るまで、主だった文芸誌における詩人に対する批評のありかたのうつりかわりも明らかにし、高踏派、象徴主義、そして新しい世紀へとむかう美学の流れにおける、ブルーストの言説の位置づけ、そしてラスキンの果たした役割について考察した。

3) イタリアのプリミティヴ派絵画の再評価におけるラスキンの影響と『失われた時を求めて』の生成。フランスの図書館での文献調査に加えて、イタリアのトスカナ地方のプリミティヴ派絵画についての現地調査も行い成果をあげることができた。殊に中世とルネッサンスの境界線にあるマンテーニャとボッティチェリのついてラスキンの言説を細かく分析し、当時のフランスの美術批評との比較を行った。その過程でブルーストに焦点をあて、この問題についての作家の見解の興味深い変遷を草稿の中に辿った。2人の画家の言及は、草稿では、両性具有のテーマに深く結びついて最終稿に近づくにつれ、関連する描写は削除されていく。ラスキンや他の同時代の批評家の影響を越えて、作家が独自の美学的世界の構築を試みたことを実証した。

尚、中世美術再発見の動きは、成果1（「美」の概念の発展と美術批評の変遷）、成果2（ラスキンが擁護した前ラファエロ派の画家たちによるイタリア中世美術の再発見と象徴派の誕生）、及び成果4（公的美術館の整備とそれに伴う中世美術の再評価）にも大きく関わる。

4) 美術館論の発展におけるラスキンの役割とプルーストへの影響について引き続き調査をした。この問題については近年発表される著書や論文も数多く、それらの成果も反映させつつ、総括をした。

5) ターナーを擁護したラスキンが19世紀末フランス美術に与えた影響の一例として知られる、印象派絵画と文学テキストの関連についても改めて考察をした。現在、エディッション・クリティックを準備している草稿ノート（カイエ34）を中心に、印象の移り変わり、色彩の微妙な変遷の描写を巡るプルーストの試行錯誤を辿った。

以上5つの成果は、国内外での学会、共著や査読制学術雑誌（特にフランスのプルースト研究で権威のある *Bulletin d'informations proustiennes*, *Bulletin Marcel Proust*) に随時発表している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

1. « *Autour des deux éditions du Canet 1: Vermeer et des écrivains contemporains de Marcel Proust* », *Bulletin d'informations proustiennes*, 査読有, n°39, pp. 47-56, 2009.

2. Yasué Kato « Proust et Mantegna », *Bulletin Marcel Proust*, 査読有, n°59, 2009年12月, pp. 47-59.

3. 加藤靖恵, 「プルーストとマンテーニャ (2)」, *Stella: études de langue et littérature françaises*, 査読有, n°28, 2009年12月, pp. 91-107.

4. Yasué Kato, « L'unité thématique du Cahier 64: Leconte de Lisle, la sensualité et l'amour », *Bulletin d'informations proustiennes*, 査読有, n°38, pp. 29-40, 2008.

5. 加藤靖恵, 「『スワン夫人をめぐる』の娼家の挿話におけるマンテーニャ・プルー

ストと『プリミティヴ派』絵画」, *Stella: études de langue et littérature françaises*, 査読有, pp. 48-58, 2008.

6. Yasué Kato, « La conception artistique de *Modern Painters* (suite) – la théorie esthétique et les écrivains français », *Gallia*, 査読有, n°46, pp. 25-32, 2007.

7. 加藤靖恵, 「吉田城先生と画家エルスチールのアトリエ – カイエ34を中心とする創作過程の解明と分析」, 『流域』, 査読無, 61号, 青山社, pp. 49-60, 2007.

8. Yasué Kato, « Proust et sa muséologie – le “musée imaginaire” d'A la recherche du temps perdu », *Marcel Proust 6: Proust sans frontières 1*, Minard (la Revue des lettres modernes), 査読有, pp. 65-82, 2007.

9. Yasué Kato, « La genèse de la préface de *La Bible d'Amiens* – suite: Proust face aux critiques français de Ruskin, Milsand, de la Sizeranne et Bardoux », *Bulletin d'informations proustiennes*, 査読有, n°36, 2006年, pp. 21-36, 2006

〔学会発表〕（計5件）

1. 加藤靖恵, 「プルーストとマンテーニャ再考」, 関西プルースト研究会, 2009年12月19日, 京都大学文学研究科

2. Yasué Kato, “Les meilleures étoffes” mitées comme des dentelles: la présentation et l'annotation du Cahier 34”, 日仏学会 Proust en son temps: contextes culturels d'une genèse romanesque, 2009年4月18日, 於日仏会館

3. 加藤靖恵, 「プルーストとマンテーニャ」, 関西プルースト研究会, 2008年12月13日, 京都大学文学研究科

4. Yasué Kato, « Les Cahiers 64, 34 et 33: le peintre Elstir et les jeunes filles en fleurs », colloque « Genèse, édition, interprétation. Les brouillons de Proust », 2008年3月21日, Ecole normale supérieure

5. Yasué Kato, « Le Cahier proustien comme mise en cadre thématique – une nouvelle lecture du Cahier 64 », 国際学会 « Comment naît une oeuvre littéraire ? – Brouillons, contextes culturels, évolutions thématiques – », 於関西日仏学館、

2007年12月7日

〔図書〕(計4件)

1. 共著「コラージュの残骸の美とハーモニー―カイエ 34 における花咲く乙女たちの物語の素描」、加藤靖恵、『文学作品が生まれるとき―生成のフランス文学』、田口紀子・吉川一義編、査読無、京都大学学術出版会、2010年予定、掲載決定

2. 共著「Le Cahier proustien comme mise en cadre thématique -- une nouvelle lecture du Cahier 64 », Yasué Kato, *Comment naît une œuvre littéraire ? – Brouillons, contextes culturels, évolutions thématiques* -, 田口紀子・吉川一義編、査読無, Honoré Champion, 2010年予定、掲載決定

3. 共著 . « Les “maquerelles” et le peintre ? : le cycle d’Elstir dans les Cahiers 64 , 34 et 33 », Yasué Kato, 論文集題名未定、Nathalie Mauriac-Dyer 編、査読無, Brepols, 2010年予定、掲載決定

4. 共著『テキストの生理学』、朝日出版会、「感覚の詩学―プルーストとルコント・ド・リール」、加藤靖恵、pp. 515-527, 2008.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 靖恵 (KATO YASUE)

名古屋大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：90313725